

説 教 『謎めいた答え』山本 護牧師

聖 書 マラキ書 3:1~3/ルカによる福音書 7:18~22

「見よ、わたしは使者を送る。彼はわが前に道を備える。あなたたちが待望している主は、突如、その聖所に来られる(マキ 3:1)」。使者の仕事はメシア(キリスト、救い主)到来のいわば「露払い」なのだが、比喩だとしてもその表現は随分ものものしい。「彼は精錬する者の火、洗う者の灰汁のようだ。彼は精錬する者、銀を清める者として座し、レビの子らを清め、金や銀のように彼らの汚れを除く(3:2~3)」。

洗礼者ヨハネは、自らがメシアの露払いであると自覚し(ルカ 3:15~16)、到来するメシアを比喩的に語った。「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場をすみずみまできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる(3:16~17)」。ヨハネが思い描いているイメージは、預言者の表象に沿った、逃れようのない裁きの調子であった。

ルカ福音書では他福音書と違って、洗礼者ヨハネはイエスのことを知らない。イエスが洗礼を受けた時(3:21)、ヨハネは獄中かもしれないし(3:20)、たとえヨハネが授けたにしても群衆の一人に過ぎなかったから(3:21)、いちいち覚えていない。幾ばくかの時が経ち、イエスの活動や業を耳にするに及んで(7:18)、ヨハネは二人の弟子を遣わして「来るべき方はあなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たねばなりませんか(7:20)」と尋ねさせた。ヨハネの胸深くに予感するものがあつたのか。

胸に予感するものがありながらも、洗礼者ヨハネが理解しているメシア像は、預言者の言葉に沿った厳しい裁きの調子であった(3:17)。だから異邦人を癒し(7:10)、死者を生き返らせる(7:15)行為は、不可解にして迷わせるような出来事だった。「ううむ、どうにも分からん。直接聞いてみようか」と弟子を遣わしたのだ。しかしイエスは、「然りか否か(7:20)」という問いの枠では答えなかった。

「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている(7:22)」。然りか否かという問いへの、この謎めいた答えは何なのか。ヨハネはこれをどう理解しただろう。あるいはこの記述を読む私たちには、何が問われているのであろうか。

私たちなら「メシアなのだから奇跡もありえる」という楽な答えになるかもしれない。だがヨハネの中では、自分がくっきり思い描く預言者由来のメシア観と、激しく衝突するだろう。イエスの答えの多くは唯々諾々承認するものではなく、問いを投げかけた者に対して「投げ返される問い」なのだ。すなわちキリストに服従する根本は、決まりごとに従うことではなく、投げ返されたキリストの問いによって、私たちがあらかじめ用意している枠や答えが打ち壊されていくことなのである。

イエスは「およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない(7:28)」と評価する。だが救いの御計画は、偉大な者の「期待と願望」さえも超えている。だから私たちが「決めている救いの基準」も、打ち壊されながら救いは成就していくだろう。私自身と衝突する福音を受け入れるには、聖霊の助けが必要だ。嵐かそよ風か、私たちはいつも、日々吹いている聖霊の内に身を置きたい。



#### 【おまけのひとこと】

あたかも自然のごとくに 救いの御計画は生成変化している 循環しながら くり返し くり返し  
同時に 判別できない長い時を变容し続けている 永遠の 創造の流れの内に 私たちはたゆとう